

さんしゃ Zapping

Vol. 30 No. 3 (通巻 179 号)

2015 年 11 月

<産社学会 ニューズレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumeai.ac.jp

<http://www.ritsumeai.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

<学部創設 50 周年記念②>

学部創立 50 周年に思うこと	伊藤 武夫	p. 3
学部創立 50 周年によせて	松田 博	p. 4
衣笠グラウンドの変様のなかで想うこと	草深 直臣	p. 6
私の教育経験	池内 靖子	p. 8
学部創設記念で思い出すこと	木田 融男	p. 10
学部 50 年。徒然に、でもなく	林 堅太郎	p. 11
柳は緑、花は紅 — 一枚の写真 —	高木 正朗	p. 14

学部創設 50 周年記念特集号の発行にあたって

2015 年度は、産業社会学部創設 50 周年の年度にあたります。そこで「さんしゃ Zapping」では、夏号（178 号）および秋号（179 号）のテーマとして、『産社創立 50 年を振り返って—あの頃の産社・現役の教職員の皆さんへのメッセージ』（仮称）を計画いたしました。

産業社会学部の歴史を築き上げてこられ、既に退職された先生方に、先生方が取り組んでこられた活動などについてのご紹介と、併せて現役の教職員へのメッセージをご執筆いただきました。

先生方が取り組んでこられた学部づくりへの思いと営みとを、現職の教職員が共有させていただき、今後の学部づくりへの契機となれば、この特集の意義も大変大きいかと存じます。

〈学部創設 50 周年記念②〉

学部創立 50 周年に思うこと

名誉教授・元学部長 伊藤 武夫

学部創立 30 周年記念式典が当時の都ホテルで挙行されたのは 1994 年 11 月 19 日(土)であった。その 3 日前の 11 月 16 日には、本学部初代学部長の細野武男先生を「偲ぶ会」が大学主催で催されていた。細野先生は 1970 年 11 月 11 日から 78 年 6 月末までの 2 期約 8 年間、大学総長をお勤めになり、1960 年代から 70 年代を通じて立命館の民主的な学風を支えてこられた方であり、私が本学部



に職を得た 1982 年 4 月以降も学部教職員の懇親会などで度々言葉を交わす機会を得た。その気さくなお人柄は今も忘れられない。

その細野先生がお亡くなりになった 1994 年が本学部創立 30 周年と重なったこと、そして琵琶湖・草津キャンパス (BKC) に理工学部が移った年でもあったことは、私には奇妙な偶然に思えた。この年の夏から秋にかけて、BKC への産社移転の話がそれとはなしに学部の教員間の話題になった事がある。結果からすれば、学部内の動向を慎重に見極めようとされた佐藤嘉一学部長はじめ執行部の方々がこの問題を教授会の議題にする前に、経済・経営両学部が BKC へ移転することになり、本学部は衣笠キャンパスにとどまることになった。

1994 年度は経済・経営両学部ともに新カリキュラムへ移行し新しい教育・研究体制を

敷こうとされていた時で、BKC への移転でさらに苦勞を重ねられることになった(1998 年度に移転)。本学部も 94 年度から 2 学系 6 コース制にカリキュラムを再編し、セメスター制を導入した。2004 年度に学部創立 40 周年を記念して作成された“「さんしゃ」も、40 歳になりました”と題する CD・ROM をみると、1994~2000 年の時期が「拡充期」となっている。6 つのコースは、産業・社会、都市・生活、情報・メディア、人間・文化、発達・福祉、スポーツ・表現に編成されたが、文化・芸術・スポーツなどを含めた人間の個性や感性の発達を促す分野に新たな展開が図られ、大学教学全体の総合的な発展に寄与することが目指された。この変化は 1990 年

頃から議論されたことが、少しずつかたちに現れてきたものとみることが出来るが、学部教育には多彩な研究者が新たに加わり、学部学生も半数以上が女子学生となって、創立期の、圧倒的に男子学生で占められていた産社のイメージは大きく変わった。

1990年に設置された「社会福祉士過程」に加えて、1997年度から「社会調査士養成プログラム」が開設され、語学教育の改革もあり、社会的ネットワークの形成、国際学術交流も一段と多彩になった。その動きは2001年度からはじまる2学科4学系への再編を軸とする諸改革へとつながるが、その間の動向はほかの諸先生に語って頂く方がよい。

ただ、1990年代半ばには、もう一つ大き

な問題に直面していた。それは大学院において、1991年度から研究者養成コースと高度専門職コースが設けられ、それぞれに如何に適切な指導体制を築くかという問題であった。博士課程前期課程・修士課程の院生数は1996年度には、前年度の22名から一挙に36名に増加した。この院生の共同研究室に1人1机を用意することをめぐって大学院主事が大変苦慮されたことを覚えている。以来、院生数は増加し、2000年度の定員増以後、博士課程後期課程の院生を含めて年々150名を超える院生を擁する社会学研究科になった。社会学理論・諸社会科学の理論を豊に身につけ、現代社会に切り込む気鋭の若手研究者が自信をもって巣立ってゆく、そのような学部・研究科であり続けてほしい。

学部創立 50 周年によせて

名誉教授 松田 博

私が本学部の教員として赴任したのは1983年、学部創立から18年目の年であった。真田是、遠藤晃両先生はじめ著書や論文等でお名前を知っていた先生方も少なくなく、赴任前に学部長面接でお目にかかった松尾博文先生は同郷ということもあって（福岡県）色々と学部のことを教えていただいたが「産社は自由な学部ですよ」という言葉が印象的であった。松尾先生はフランス、イタリアのジャーナリズム史についての造詣が

深く、またテレビ界出身ということもあって話題が豊富で喫茶店などで先生の鋭い時事解説を聴くことができたのは楽しい思い出であった。諸先生方から「大学自治」の根幹としての「教授会自治」を含む全学的「構成員自治」の意義や教員、職員の協働（教職協働）の重要性について「熱い」話をたびたび伺うことができた。「民主主義を語ることは美しいが、それを実践することは大変難しいことである」と常々語られていた松尾先

生の言葉は今も鮮明に覚えている。

4月初旬の初めての教授会でも学部の教学問題についての議論が白熱し、終わったのは夕方近くであった。学部創立20周年にむけての議論であったと思うが、導入期教育（基礎演習＝プロゼミなど）および学際的な学部にあふさわしい専門教育の充実などについて活発な議論が教授会で交わされた。学際学部にあふさわしい「学部の目鼻立ち」を明確にするということが多く語られたが、大学教師としての教育責任の重さを実感した年でもあった。この「目鼻立ち」論は1987年に「4コース制」の導入によって具体化されたが、私自身このコース制によって学部教育のイメージがかなり明確になったことと同時に研究と教育との相互関連性を自覚する契機ともなった。ある時真田先生から「研究者であることと教育者であることの両立は生易しいものではなく、結局はその人の生き方にかかわる問題です」と言われたことは今でも忘れがたい言葉である。多くの個性的な先生方から研究、教育について刺激的でときには辛口の助言をいただいたことや問題意識旺盛なゼミ生、院生に出会えたことは私の教員人生の貴重な財産になっている。「ゼミは知的格闘技である」というキャッチフレーズは男子学生が多数であった初期にゼミ生が考案したものである。「楽しくなければゼミではない。楽しいだけではゼミではない」は中期のものだが、女子の比率が男子を上回った頃である。

教職員組合でも執行委員、職場委員などを経験したが、有能なベテラン職員の協力は有難く、文字通り「教職協働」の意義を実感したものである。当時の組合の軸足は「学



園創造、教学創造を支える賃金厚生要求の実現」であり、具体的には東京6私大を含む「9私大水準への到達」であり、9私大水準からの「落ち込み是正」の具体化が焦点であった。また手狭な個人研究室スペースの2倍化も重点要求であり、これは一挙ではないが組合の粘り強い取り組みによって徐々に実現していった。当時理事会との交渉などで感じたのは、理事会も「構成員自治」を重視し、組合の諸要求にも真摯に対応するという「大学創造の一体感」を尊重するという姿勢であった。時代も変わり、学園規模も当時から見ると大幅に大きくなった。21世紀の学園創造にあふさわしいスケールで「構成員自治」や「教職協働」を基礎とする「一体感」が再生し、発展することをOBのひとりとして心から期待したい。

余談ながら、1988年、ヨーロッパ最古の大学であるイタリアのボローニア大学は創立900年の記念式典を行い、同時に欧州の主要大学の学長を招いて国際会議を開き「ボローニア大憲章（マグナ・カルタ）」を発表した。そこでは基本理念として「研究・教育

の自由」、「大学組織の第一義的意義としての自治」、「権力にたいする批判的見解の自由」の3点が重視されている。また「教学理念」としては「あらゆる政治的・経済的権力にたいする精神的・学問的自立性」、「研究活動と教育活動の不可分性」、「不寛容に対する拒絶および持続的対話の促進」、「知識、諸文化の相互交流の必要性」の4点があげられている。長い歴史と伝統を持つ西欧の大学においてもこれらの「理念」は自然成長的

に形成されたものではなく、大学構成員の持続的対話を基礎とする「自治・自立」の取り組みによって守られ、発展させられるものであることを、この「大憲章」は示しているといえよう。この精神は先人の努力の成果である本学の「立命館憲章」にも共通しているといえよう。産社創立50周年が学部教学、研究のさらなる充実と発展の新たな一歩となることを期待したい。

(2015年8月24日)

衣笠グラウンドの変様のなかで想うこと

名誉教授 草深 直臣

1936年に発足した日本プロ野球は、戦後、新規参入球団が増え、1950年に2リーグとなった。そして、その年セントラルを制したのが、小西得郎監督率いる新生球団「松竹ロビンス」であった。ロビンスの優勝の原動力はなんといっても「水爆打線」と称せられた強力な打力であり、その中心は51ホームラン、161打点の二冠に輝いた MVP 小鶴誠である。小鶴のホームラン記録は、王貞治、バレンティンによって破られたものの、161打点はいまだにプロ野球新記録である。

その「松竹ロビンス」の本拠地が「衣笠球場」であった。では、「衣笠球場」ってどこ？かということ、現在の正門からみて南西部に位置し、現在の第一体育館（解体・工事中）、学生会館、存心館、充光館、創思館を含む一

帯に、両翼90M、センターライン112Mで、2万人収容の木造スタンドであった。（この項、『立命館百年史』史料、「衣笠球場物語」参照、写真が掲載されている。）

ここは、正式には「立命館衣笠球場」であり、48年に完成した大学体育や学生スポーツ施設であった。「衣笠球場」では、当時「西京極球場」が占領軍に接收されていた関係で、立同戦をはじめ、高校野球大会なども開会されていた。その後、「衣笠球場」は「ロビンス」が難波球場の完成に伴い拠点を移し、また木造スタンドの危険性による使用禁止によって、1956年に取り壊され、中央グラウンドのみになった。

所で、戦後の新制大学の発足に際して、導入された保健体育科目（特に「体育実技」）

の必修制は、とくに都会における私立大学にとって、用地確保の上で大きな重荷であった。

僕が本学法学部に赴任した 1975 年当時、法学部、文学部並びに全学部の二部が広小路学舎にあり、体育施設としては、現在の府立医科大学の体育館、テニスコート、河川敷でのバレーボールコートと、他に御所のグラウンドを借用していた。この施設で、1 時間（コマ）当たり 300 名から 350 名を 6 クラス編成で収容するのであるから、何とも窮屈であった。一方、衣笠キャンパスは、第一体育館（2 階コート 6 面＝2 クラス、1 階ピロティ＝卓球）、中央グラウンド（ソフト＝2 クラス）、そして現在は敬学館になってしまったテニスコート（5 面）を保有していたから、広小路に比べれば、いくぶん余裕があった。

しかし、全学部移転によって、まず中央グラウンドが存心館と尚学館の新設によって、ソフト 2 クラスが収容できなくなり、そして、学部の規模がますます大きく成るにつれて、「体育実技の負担は何とかならないか！」と、「理事会」から何回となく責められた。教授会でも、専門の教授達から、「何故必修なのか？根拠を示せ！」と詰られ、「体育教師に研究室が必要か？」と放言した学生担当理事もいた。

何故、大学教育に保健体育科目が必修となったのか？は、その後、「体育・スポーツの戦後改革の実証的研究」（1992 年度文部省研究助成）の一環のなかで、大学正課体育の必修化は、「選手制度」に寡占化されていた戦前の体育・スポーツに対して、まさに、一般学生に対して門戸を開放し、体育・スポーツを普及し、質的に向上させていく全体構想のなかの中軸としての改革であることを明ら



かにしたが、その理念はともかく、大学体育の実態と条件は劣悪であったから、60 年代後半の大学闘争の批判の対象にもなった。

また、戦後教育の成果として、学生の自主的なスポーツ活動として多くのサークルが生まれ、エリア・サービス要求やプログラム・サービス要求などが拡大し、こうした事柄も、本学の学園振興懇談会の議題にもなった。

かくして、現在の衣笠体育館の場所に「第二体育館」が新設されると共に、原谷グラウンド新設になる一方で、教養科目の自由裁量化によって、「体育実技」の必修制の廃止と「スポーツ方法論」への再編によって、いわゆる「実技」クラスの大幅減少を断行した。

そして、1992 年の産業社会学部における「スポーツ・表現コース」の新設と教員の拡充が図られ、2000 年からの「スポーツ社会専攻」へと発展してきた。「コース」や「専攻」の卒業生は、すでに 2000 人を超えており、また大学院での博士号取得を果たし、一橋大学、立命館大学などで活躍している若手研究者もいる。そして、その力が BKC の「スポーツ・健康科学部」の設立へとつながっていった。

しかし、こうした専門科目の充実やスポーツ科学研究の高度化を生んだ体育教学の改革を、単なる「合理化」に終わらせないためには、改めて、サークルや一般学生を念頭に置いた「スポーツ方法論」のグレード別開講やさらに、市民を視野に入れたプロ

グラムやエリアの連携によるサービスの充実が、検討されるべきであろう。

スポーツは“する・みる・支える”時代から、市民自身が自分たちのためのスポーツを実現する“考える”時代に突入しているのである。

私の教育経験

名誉教授 池内 靖子

私は、1978年4月から立命館大学産業社会学部の専任として赴任し、以後34年間勤務し、2012年の3月に定年退職した。立命館大学での教育研究に費やした時間は、私のこれまでの人生の半分を占める。それはまた学部創設50周年という歴史とも重なる時期であり、ずっしりと重い。学部だけでなく、大学全体の歴史とも関わって、学生、教職員とともに、その時々課題について真剣に議論し取り組んできた経験は貴重なものだった。ここでは、そのごく一部、私の極めて個人的、限定的な経験について記しておきたい。

まず、私事で恐縮だが、私が産社に赴任することになった時、私の夫は京大から北大へ赴任が決まり、私は一人で幼い娘を抱えて勤め始めた。娘が生まれる前から保育所作りで、対市交渉をし、同じ保護者仲間と個人の家で共同保育所を始め、保護者会などに積極的に関わってきた夫と遠く離れ、一人で育児とフルタイムの仕事を両立するのはたいへんなことだった。当時の産社教授会は、午後1時半から夜8時9時を過ぎても終わらず、二

重保育の確保に頭を痛めたものである。

また、私は産社の英語教員として採用されていたので、学部の専門教員にはない苦労があった。学部を超えた外国語連絡協議会（外連協）、現在は言語教育センターであるが、英語部会での時間割作成や、大学における外国語教育に関する様々な課題へ取り組まなければならない。これは教養課程に関わる教員とも共通しているが、学部の役職だけでなく、各言語部会の役職もあり、二重負担となる。とりわけ、英語教員は、入試に英語は必須の科目であり、毎年英語出題委員を学部から2名ずつ出さなければならず、各学部に配属されている英語教員数は多いとはいえ、他の言語にない過重な負担を果たしてきた。

また入学後の全学生の英語力の到達度を量るため、TOEFL採用導入を大学当局から迫られた時は、私たちはTOEFLだけで英語力の到達度を量ることに反対し、大きな議論になった。産社から全学役職のトップに就いておられた真田是副総長が、「大学は工場ではないので」とおっしゃって、全員TO

EFL受験に反対する私たちに理解を示された。その後、全員TOEFL受験は導入されていくが、当時、トップダウンで指令するのではなく、現場の教員の意見を尊重しながら議論を深めていく、見識を持ったトップの在り方があった。それは産社学部教授会の在り方にも根差す良き伝統であるように思われる。

ところで、私は学部だけでなく、全学の役職も、けっこう積極的に引き受けてきた。学生主事、国際センター副所長、UBC-JP 教務主任、学部主事、言語教育センター英語部会長などである。

1980年代後半から、大学は「国際化」という方針を取り、海外の大学や研究機関との協力提携を拡充していった。UBC-JPは、産社の奥川先生がカナダのUBCとのジョイントプログラム確立へ向けて準備をし、第1期生を連れて教務主任を務められたことから始まった。私は第2期生を連れてUBC-JPの教務主任となった。ルールはすでに敷かれていたが、UBC-JPのUBC側の教務主任や担当者との交渉は、コース設定、学生の英語力や学力、受け入れ態勢をめぐって、かなりハードな業務だった。また、UBC-JPに参加する立命館の学生100人に、英語教育とUBC-JPの科目を受けさせ、UBCキャンパスの寮生活の面倒をみることはたいへんな仕事で、一緒にUBC-JPの勤務について立命館の職員の働きがなければ、スムーズには行かなかっただろう。1期目は、鈴木永祐さん、2期目は相根誠さんで、大いに感謝している。

UBC-JPで私が学んだことの一つは、TAの活用だった。私の講義には、学生10~15名につき一人の割合でTAが入り、グループ



に分かれて講義内容について議論を深め、小レポートを添削する。そのTAたちと担当教員は学生の学びやレポートについて語りあい、その次の授業に反映させていく。TAは単なる資料配布や出欠管理の補助ではなく、授業内容や進め方に深く関わっている。TAを引き受ける大学院生の専門に関わる科目の補助につくので、自分たちの専門を活かした教育経験を積むことができるし、彼らの教歴にもなる。立命館に戻ってこのTAの活用について報告したところ、その後、立命館でもTA制度が導入されていった。UBCでのTAの活用の在り方からは遠いが、今後もっと大学院生の教育経験にプラスになるように改善されることを願っている。

退職後は自分の好きなことをする自由な生活を満喫している。写真は、今年アウシュビッツとビルケナウに行った時のものである。戦争法案の強行採決に抗して、戦争反対の意志を固める旅になった。

学部創設記念で思い出すこと

名誉教授 木田 融男



産業社会学部創設 50 周年記念行事が現在行われていますが、今までの創設記念から思い出すことを書かせていただきます。30 周年では私は学部主事(現副学部長)でしたが、教学理念(現代化、総合化、協同化)に当時新しく国際化、情報化が加わっており、そこで「産社らしい」国際化ということで、アジア社会を視野に入れた行事が組まれました。アジア(中国、台湾、韓国等)からの留学生に催しを企画してもらう支援が、私の役割でありましたが、各地域の劇や踊りを留学生に演じてもらうとか、また以学館の前の広場で母国の食べ物の模擬店を開いてもらうとか、また行事全体の最後には、招いた韓国舞踏団に勇壮な舞いを披露してもらうとかの企画や実行について、サポートさせて頂きました。当時の立命館の国際化の相手はまだ欧米が

中心でしたが、産社の国際化はアジアの人々とも向き合い共に歩むことなのかなとふと思ったものです。次の 40 周年は私の学部長の時期だったのですが、ツレアイが病に倒れ役職を辞し、介護休暇をとっておりました(辞職の翌年にツレアイは死去しました)。復帰後に創設記念行事のテーマ「産業社会の変容と市民社会の再生」の国際シンポジウムや共同研究には協力させてもらい、その内容は故篠田先生への弔辞に紹介した本誌にも掲載していただいたのですが、その研究スタイルはまさに研究と教育における現代化、総合化、協同化そして国際化という、教学理念の産社学部における具現化であったなど今は振り返ります。

各期の創設記念行事であった映画関連(上映や企画講演/対談等)の催しは、それぞれ私にとっては特別の感慨があります。30 周年記念ではテーマのアジア社会に関わって、在日朝鮮人/韓国人の新しい姿を描いた映画『月はどっちに出ている』の上映と、その監督である崔洋一氏の講演があり、私は控え室で崔監督の話し相手の役割をおおせつかりましたが、監督の奥深い人柄に直接に触れる事ができたのは印象的な時間でした。次の 40 周年の催しには是枝裕和監督をお招きして、当時学部長の佐藤春吉先生(辞職した私と交代して下さいました)との対談がありました。家族を亡くし元気を奪われていた私の

娘を癒してくれる一つがレンタル映画を鑑賞することであり、とりわけ是枝監督と彼の映画に惹かれていた娘がこの対談には行きたいと希望したので、私は娘を連れて催しに参加しました。対談を終えた監督に頼んで娘と会っていただき、娘は古本屋で見つけて大切にしていた監督の著書にサインを頂いたり、直接に話をしてもらったりして大層喜んでいました。後のパーティにも監督のスピーチがあるからと珍しく大勢の人がおられる席にも座っておりました(そこで何人かの教職員の方々から娘を心配して声をかけても

頂きました。後に娘は、映画館(烏丸の京都シネマ)の契約社員をしたりして、昨年には映像制作を志す「監督の卵」の男性と結婚しましたので、心配して下さった方にお伝えしておきます)。そして今回の50周年の催しとして、長岡参監督の『産土』という日本の山間や森林に生きてきた人の語りと映像の作品が上映されますが(高嶋正晴先生のご尽力によるものです)、この映像づくりには「監督見習い」として娘のツレアイも参加していたのです。

学部 50 年。徒然に、でもなく

名誉教授 林 堅太郎

前々号の Zapping、新任の方々の学部への意欲ある想いが記されていた。

私、常々、このミニコミ紙は先生方の普段の率直な姿が上品に描かれていると思っている。その点、聊か気後れするが、私も参画する機会を得て、心嬉しく思う。

I) 「現・総・共」

私は、学部での生活、もう40年以上になる。最初の周年事業は20年目だったが、私は事務局を担当していた。その記念誌を編集した時、奥田先生が、ガリ版刷りのチラシまで、学部設立以降の膨大な資料を丁寧に残されているのを知って、妙に感動したのを覚えている、流石、歴史学者だと。

私には、毛頭、そんな才覚はない。だから、これは適当に読み流して頂きたい。ただ、例

えば、中川先生が「これが美味いんだよな」と、教授会が遅くなると美濃屋が届けるキツネうどん、その余った、しかも充分に伸びきった鉢を一緒に片づけていたことなどは明瞭に覚えている。30人ほどのメンバーだったが、会議が8時頃まで続くことは、普通に、あった。

討論が長引き、疲れ切った頃、教授会は終了。ほどほどに下地は出来ているから、近所の居酒屋で一頻り、総括討議をやる。心地良い一時であったことは間違いない。しかし、そんな環境もあって、「現・総・共」のローガン、つまり現代化、総合化、共同化によって新進学部の内実を発展させていこうとする強い意欲がしっかり共有されていたと思う。



II) 展開期。でも急性脳炎でダウン

90年代初頭は、大学の社会貢献、地域貢献が積極的に位置づけられる時期だった。人文研に地域研究室が開設され、リエゾン・オフィスが研究部に設置された。

私もアカデミック・インフラ（知的社会基盤）研究に参加した。やがて京都市が事務局となる「大学都市会議」の毎年開催や、京都府の「環日本海アカデミック・フォーラム」による国際シンポジウム開催などを主幹することになった。ポスト冷戦の移行社会も巻き込んで、北東アジアを含む国際、そして国内のネットワークは格段に広まっていったと思う。前者の「大学都市会議」は、生涯学習や産官学連携、地域の国際化などをテーマにし、神戸震災での学生ボランティア活動なども経験交流した。

一方、学部では日本医療生協の寄付講座と共同研究が03年度から数年間、実施された。学部が機関として外部の団体と連携したのはこれが初めてではないかと思う。篠崎先生がキャップとなって、藤原、河合、リム先生が参加され（松田亮三先生は当時、他の大学勤務）、何故か、私はここでもコーディネー

ターとして加わることになる。当時の大学院生が数名参加するが、本学の黒田、中西典子先生もその一員だった。地域医療研究が主たるテーマだったが、これを発展させてヨーロッパ（デンマーク、スイス、イタリア）の関係諸機関の調査も行った。

そんな頃、戦後50年を迎え、立命館は、全学あげて50に近い「平和企画」を実施することになる。当時、私は国際平和ミュージアムの企画局長を務めていた。やがて最大の企画として「世界大学生平和サミット」を開催することが決まり、私が事務局局長に指名されてからは、国内外、東奔西走の毎日となった。ユネスコのパリ本部へ後援依頼に出かけ、世界平和博物館会議（スイス）や報道写真展本部（オランダ）、また学生を連れて何度か東南アジアの大学を歴訪して学生の参加を呼びかけた。そう言えば、今ではジョークで済むけど、パリ本部では「分かった。局長に頼むわ。その代わりに、京都で観光案内してね」と、複数のセクレタリーから強いネゴシエーションを受けたこともある。

何しろ、結果、36か国100大学481名の学生が参加して大きな成果。徹夜の討論にも付き合った。産社の先生も大勢、参画して頂いている。終了時、参加学生から、「これからも開いて下さい」と頼まれた時には、「ウーン」と唸った記憶がある。でも、ほどなくAPUが開学する運びとなり、そこでは「学生サミット」も開催されるようになった（APUの副学長在職時に「世界大学生観光サミット」を準備したのは因縁か？）。

しかし、翌96年早春、インフルエンザが拗れ、急性脳炎で3週間意識不明、そして三ヵ月のリハビリに取り組み羽目に陥ってし

まった。50歳の曲がり角であった。

Ⅲ) 調査企画室長の頃

病み上がりだのに、96年度から調査企画室長に就任。担当医が「大学の先生の仕事というのはリハビリ程度だから」と、無責任な意見を書いたものだから、大学のトップは喜んで任命したのである。「でもリハビリ中だから夕刻には帰りますよ」と宣言して、業務をスタート。その影響か、この事務室は他に比べれば早めにライトが消される効用もあったような気がしている。企画の業務、世間とは真逆だろうか。

経済、経営、理工学部がBKCに移って、残る5学部のキャンパスをどのように再開発するか、がその中心的なミッションであった。私自身、2年の任期を4年に延ばす大事業となる。それは単なる建物再配置ではない。衣笠キャンパスにおいて教学の国際化、人間化、文化化を推進し、教育研究の質を向上させるのが目的であった。

国際関係学部に移ってもらい、ここをコアに、国際インスティテュートという5学部が参加する教育プログラムを開発する。アート・リサーチ・センターを設置して、特に京都の芸術・文化の継承と発展を支えていく。文学部・心理と産業社会学部・福祉をブリッジする応用人間科学研究科を設置する、という内容が主たるものであった。国際関係学部は、かつての恒心館、そして産業社会学部は以学館の抜本的なリフォームによって整備された。ちなみに、新設のアート・リサーチ・センターと応用人間科学研究科の建物は、不況対策の一環として期待された文部科学省の手厚い補助を受けて建設されたものでもある。

教育研究の水準を上げる、ということでは、この間、世銀の指導によるGDN (Global Development Network) の立ち上げに大学として参画 (99年、ボン) したこと、仲間先生に同行して、ゲティ財団 (ロサンゼルス) を訪問したことが印象深い。また、先の環日本海アカデミック・フォーラムにも関わって、舞鶴市と学術協定を結んで、地域の国際化、産官学連携、立命館市民講座などに取組んだり、学部の社会福祉士課程の実習施設をまとめて社会福祉協議会に斡旋して頂く、といった地学連携が進んでいたことも嬉しい経験である。この時期、内緒にだけ、当時の門脇学長から相談があつて、京都橘女子大学の新学部、文化政策学部の立ち上げにも関わっていた。その後この大学の学長になられた元総長の大南先生からは「どうして前もって教えてくれなかったの?」と、苦情を聞かされてしまった。

Ⅳ) そして

00年代、就職部長を2年ほど勤め、さらにAPUに派遣されることになった。APUから戻ってからは一貫教育担当の仕事を受け持つことに。就職部長の時は、不況の間只中、就活は厳しい状況なので、「自信と誇りをもって社会進出するために」といった政策文書を作成し、学生にとって社会への入り口にあたる就活のために、教授会で「高度人財」の育成をはかる討議を進めて頂きたいとお願いしたことを覚えている。

私は、調査企画室長の頃から教授会出席は遠慮するようにしていた。諸般の忙しさもあるが、5学部共通の利害、あるいは大学、学園全体の事業のために一学部の立場を持ち込んではいけない、という気持ちがあった。

ただ、初めのところで紹介した「現・総・共」のスローガン、これは、特に産業社会学部にとって、前進的、時には急激な学部の教学発展や、学部のスタッフの元気さの源にあるもののように感じているし、私自身にとっても、

40 数年の立命館での生活を通じて、かなり雑駁だけど、それでも様々な仕事に前向きに取り組ませてくれる、その推進力になっていたように思うのである。

柳は緑、花は紅

— 一枚の写真 —

名誉教授 高木 正朗

文化の日が近づくと、小春日和はやって来るだろうかと考える。この日和となれば、キャンパスの紅い山茶花をみながら、碧空のもと、暖かい秋口の大気を、束の間でも楽しむことができるからだ（今年は幸い、それが叶った）。

確かに、構内にあふれる若者たちは屈託がくつろぎない。しかし彼らは、この束の間の人心地をすぐに霧消させて、われわれを「現実」に連れもどす。

いま、衣笠図書館のゲートを入れて左手、壁側の陳列ケース下段に、立命の歩みを撮ったモノクローム写真が展示されている。題して「自校史—立命館のあゆみ—」。そのなかに1枚、図書館での勉強風景がある。この写真は、以前もおなじ感慨を懐かせたから、ぼくにはアピール力があるようだ。場所は広小路図書館、年次は1960～61年という。

1960（昭和35）年といえ、彼らは法経・文の学生であろう。女子は一人もいない。この時期、四大への進学率は男子でも14%以

下だったから、彼らはそれなりに「選ばれた者たち」だったであろう。みな学生服を着ている。机上のコート、達磨ストーブを見ると、季節は冬である。

服装や室内の調度、明暗はともかく、目をひくのは、その表情というか、頑健なからだつきというか、彼らがかもす雰囲気である。要するにみな大人、立派な社会人なのである（背筋をのばし、表情には緊張感、使命感のようなものすら感じられる）。生まれは1940（昭和15）年前後だから、彼らは5歳のころ敗戦をむかえ、厳しい飢餓・空腹をも体験したはずである。なかには、戦地で親を亡くした者、安否がいまだ不明という者もいたはずである（はやく卒業して、一家を支えねばならない）。

彼らは、若いころは高度経済成長を支え、中・壮年期にかけて成長の果実を手にして、何事もなければ今70代後半に達した世代である。

さらに時間を遡ってみる。するともう1つ、NHKのおもしろい映像に行きつく。それ

はずか 1 分ほどのもので、タイトルは「その時、日本は」だったかと記憶する。

時は 1946 (昭和 21) 年前後だろう、場所は東京駅のプラットホーム。蒸気機関車が関西方面から到着して、乗客がどっと下りたち、ホームは混雑する。大陸からの引き揚げ者、軍人・軍属あるいは疎開者たちだろう。その時、学生服・学生帽すがたの一人にフォーカスがあたる。驚いたことに彼は、人々の流れにむかい、心を込めて、こう呼びかけているのではない。「お帰りなさい」「オカエリナサーイ」。わずか十数秒のこの一齣もまた、われわれに深い感動をよびおこす(こういう学生もいたのか！)。

彼がどこの学生かはわからない。しかし、エリートとしての使命感、良心をしっかりとそなえた男子だったに違いない。

現在にもどる。広小路図書館の写真は 1960 年に撮られたものとすると、この年、日本の大学生はわずか 52 万人、うち私大生は 31 万人 (立命の文系は 1 万人) に過ぎなかった。その後、半世紀をへた今 (2015 年) の在籍数は 286 万人、私大生はなんと 210 万人もいて、進学率は 50% である。産社には今 4,000 人が在籍している。これは、紛れもない「現実」である。

しかし、人数が多いからと言って、学生に苦情をいう気は、今のぼくにはない。何故なら、第一次ベビーブーム世代のぼくらは、良きにつけ悪きにつけ、大学大衆化の余徳に与った者たちで、制度でいえば「課程」修了者である。戦前教育をうけた先生方にすればどこか危うく、「小粒」と形容された方も実際にいた。勿論、同世代には、顕著な仕事をのこした人が何人もいる。しかし文系の、概

して小粒な者たちに、影響力のある教育や研究はできたのか？

10 数年まえ、ぼくは偶々ヘンリー・ロソフスキーという人の『大学の未来へ』(The University, An Owner's Manual, 1990) を読んで、そこに書かれた教授候補者のリクルート方法に仰天した。要するにノーベル賞選考方式なのである(無知だったというほかない)。

この方式は、アメリカのどの大学も採用しているわけではなからう。西欧はどうか知識がないが、しかし日本の大学人にとっては今も、「最も厳しい現実」以外の何ものでもない。森嶋通夫の『なぜ日本は没落するか』(1999 年) もまた、この実感を強めさせる内容である。ぼくらは果たして、「大学の先生」なのか？(THE、QS など世界大学ランキングを見れば、答えは一目瞭然である。)

教授といい助教授といっても、大衆化以後のわれわれの場合、それは「名称」ーバラモンや仏教思想でいう「実在なきもの」ーの 1 つに過ぎなかったといえる。この名称(ラベル)は「外」が、目先(科目担当)の必要と慣行(年功制)とに迫られ、便宜的に貼りつけた仮構ともいえる(故に、個々の内実は千差万別、理念通りの事例はごく稀だったであらう)。それにも関わらず、ぼくらは、この名称を貼られた途端、ラベルに相応しい要件を満たしているとか、そう評価されたのだなどと、即座にあるいは徐々に錯覚していったのではないか。

そう考えると、われわれに求められていることは唯一つ、「名称」ではなく不断の内省ではなかったか(自己制裁ともいえる)。す

なわち、ラベルに何を書き込んできたのか
「みずからの言葉」は持てたのか、日々みず
からを査問しているか？ ということである。

結論はこうである。文系のわれわれはみず
からを「如」と考えるほうが良いのではない。
ごとし
いか。つまり、大学のようなところにいる「先
生のようなもの」だと（これは、*林達夫が
かつて言った「アマチュア精神」に一脈通じ
るかもしれない）。そう考えれば、肩の荷は
かるくなり、余裕がうまれる。余裕がうまれ
れば（たとえ多数、多様、後ろでスマホでも）
学生を愛せるし、研究にも手応えを感じるだ
ろう。「柳は緑、花は紅」。こう諦観すれば、
たいかん
われわれの人生はもっと愉快になるに違
いない。

尤も、現役の皆さんには、「内省」だけは
決して忘れないよう肝に銘じてほしいと、ぼ
くは希望している。そうすれば、次の半世紀
はより心強いものとなるに違いない。

*「十字路口に立つ大学—困った教授、困った
学生—」（著作集 6）平凡社 1972 年。

（「自校史」写真については、図書館の中井
康雄君（管理課）のサポートをえました。）

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、
課外活動報告などあらゆるジャンル
のご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいき
たいと思っています。何本かまとめ
てのご投稿も大歓迎ですので、ご提
案がありましたら事務局に申し出て
ください。形式はタイトル・名前・
本文をつけ、1,500 字～2,000 字程度
でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsume.ac.jp
に送付していただきますようよろし
くお願いします。